

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）

氏名： レットソン ジェームス デウィー
LETSON, James Dewi

学位論文題名

A Life Lived Punk: Live Music and Intergenerational Relationships in Aging Japan
(パンクとして生きていた人生：高齢化日本におけるライブ音楽と世代間交流)

・本論文の観点と方法

世の中の「ポスト・インダストリアル」と言われている国々はほぼ「少子高齢化」という人口統計的な傾向が継続している。その傾向の先駆者の日本は、他国の政府や NGO に注目されながらも、この状態に対する様々な研究と対策案が多少ある。本研究はその一つでもあるが、少子高齢化に対する政策や老人ケアにおける問題などが注目ではない。むしろ、札幌市で長い間活動している「パンク」というサブカルチャー的なコミュニティの日常生活とそのメンバーの個人史が対象となる。筆者が学部生の時から継続している「札幌パンク」に対する文化人類学的でエスノグラフィー的なフィールドワーク調査を由来しており、本論文はそのエスノグラフィーの継続することに得たデータと、10代から50代までパンク活動を続けている人のライフ・ストーリーが研究データの基本となる。それに踏まえ、「エイジング」という概念を「高齢化する」よりも「時間をかけて変化する」というように問い直すことをしながら、「パンク」という日本社会に関する先行研究であり注目されていないグループから、「(経済的)不安定」、「無縁社会」など日本の高齢化社会における問題に対して日本や少子高齢化を向かっている国々のいわゆる「主流社会」が何か学べることあるかという問いを立つ。

・本論文の内容

筆者の先行研究では、札幌市で活動している「パンク」というサブカルチャー的なコミュニティは著しく調和的であり、世代間交流の強いグループだと論じられている。それに踏まえ、本論文の主な注目はこういう人々はどうやってこのような状態になってきたかというのである。それを明らかにし、解説するため、継続的なエスノグラフィー的なフィールドワークに加え、10代から50代まで「パンク」として生活してきた9人のライフ・ストーリーも収録した。理論的に、「世代間交流の文化人類学」というのが存在していないため、本研究は「関係性の文化人類学」というフレームにし、札幌市に居住している「パンク」コミュニティの間における「関係性」を分析や解釈するように、「プロセス」、「パワー」、「エフェクト」という3つのレンズを通して考察する。

本論文は、上述の3つの論理的視点の分けに従い、5部に秩序されている。第一部の「イントロ」と第五部の「アウトロー」に挟んで第二部から第四部は各々「プロセス」、「パワー」、「エフェクト」となる。第一部の「イントロ」には、エスノグラフィー的なシーンで札幌の「パンク」という人々の現在の状態を紹介しようとする「はじめのエピソード」、序論となる第一章、そして研究方法とそれに対する問題への検討の説明とする第二章が含まれている。第二部は「プロセス」という論理的な視点から見る札幌におけるパンクの歴史その一部となる第三章とそれに踏まえコミュニティ論を適用し「札幌パンク」というグループのコミュニティ造りが書かれている第四章である。第三部の「パワー」は、上述の9人の中での8人のライフ・ストーリーを語ろうとする第五章、そして「社会的重力」という理論を利用し、その人々の人間関係における「パワー」を分析する第六章が入っている。第四部の「エフェクト」には、札幌におけるパンクの歴史（筆者のこのコミュニティとの関係も含む）その二部となる第七章とグループの中での人間関係管理を「ヘテロトピア」という論理的な視点から現在のあり方を解釈する第八書がある。最後に、第五部となる「アウトロー」は、結論となる第九章、そして参考文献一覧と2つの追記が含まれ

ている。

結果としては、札幌でのパンク・コミュニティは当局への抵抗、主流文化社への批判、そして「DIY」(ドゥー・イット・ユアセルフ)に基づく「パンク」というトランスグローバルサブカルチャー的世界観が、札幌市とその周辺の独特な地理や歴史に影響され、「自分たちがやりたいことを自分たちの力でやらないとどうにもならない」という態度がさらに強くなってきたと言える。それが原因で、札幌のパンクという人々は、他の国や地域の同様のコミュニティで度々問題になってくる「パンクとは何か」という問いよりもむしろ「パンクは何をするか」というのが重要されている。その結果、ライブ音楽の活動とそれへの支援を中心に、「パンクをする」という観念が大事である。その観念に基づき、このグループが「コミュニティ・オブ・プラクティス」の特徴を持ちと同時に、「コミュニティ・オブ・ケア」のようなものに発展してきた。しかも、この中で長い期間をかけて成長してきた人々は、人生で札幌市における「パンク」という「ソーシャル・フィールド」に様々な経済的、社会的、そして文化的資本を沢山投資する。その影響、パンクのグループの中ではそういう人が「社会的重力」を持ち、個人の経済的な状況にもかかわらず、「不安定」と感じずに生きている。最後に、このような由来し、このコミュニティは「ヘテロトピア」のような機能もある。これは周りの社会のことを問い直そうとしながらも、自分がそれとの社会的関係などを完全に切り取ることができないと認める空間である。このような所では、そこにいる人々は多義的に活動することができるため、主流文化で支配されている人(特に女性)が「パンク」という世界へ入っても、その問題から脱出することがほぼできない。しかし、その多義性があるので札幌のパンク・コミュニティが長い間平和的に存在しているかと思える。

本研究は、主流社会にほぼ注目されていない「パンク」という人々への質的検討で、歯止めがかからないように少子高齢化が進んでいる社会に生活しているにもかかわらず、こういう人が「すること」を優先することで、調和的で安定している長寿のあるコミュニティを構造することができたというのを明らかにしてきた。札幌のパンクスがこのようなことをできるならば、日本のいわゆる不安定で少子高齢化している無縁社会の中では他のグループでもできるのではないのだろうかということも論じられる。